

ニュースレターくもと News Letter Kumamoto

秋
Autumn
2012
vol. 95

■ Publisher : Kumamoto International Foundation
KCIC 4-18Hanabata-cho, Chuo-ku, Kumamoto City, 860-0806
Tel : 096-359-2121 e-mail : pj-info@kumamoto-if.or.jp
URL : http://www.kumamoto-if.or.jp/

■ 発行 : 一般財団法人 熊本市国際交流振興事業団
〒860-0806 熊本市中央区花畑町4-18 熊本市国際交流会館
Tel : 096-359-2121
e-mail : pj-info@kumamoto-if.or.jp
URL : http://www.kumamoto-if.or.jp/



CONTENTS

外国から熊本に来た子どもたちの現状……………	1・2P	世界を知る～国際共通語「エスペラント」～……………	6P
国際ボランティアワークキャンプ 報告……………	3P	未来のために～TICAD VIに向けて～……………	7P
ちょっといわせてはいよ I・II……………	4・5P	ちょっと日本語/きふプロ/イベント情報……………	8P

外国から熊本に来た子どもたちの現状

1. 外国から熊本へ来た子どもたちの背景

現在、熊本県の外国人登録者数は約9000人で、国籍は中国が一番多く、次いでフィリピンです。この中に400人近くの子どものうち約70名の児童生徒が初期日本語指導が必要とされています。その半数は熊本市や周辺の市町村の小中高に在籍していますが、あとは県下各地に散在しています。親の来日理由の多くは、仕事(例:中華料理の料理人など)や、日本人との国際結婚です。

自ら望んで来た子どもは少なく、来日の2,3日前に親から日本へ行くと告げられた子どももいます。また、熊本に呼び寄せられるまで、数年間、国で祖父母や親戚に預けられていたため、日本に来て、親子関係を再構築できない子ども、母親の再婚相手の日本人男性が受け入れられない子どももいます。両親共に外国人の場合、日本の学校制度が理解できない上に、仕事や生活に追われ、子どもたちのケアができない場合もあります。

このような家庭環境の子どもたちは、日本にいる事実すら受け入れられないまま、言葉も制度も文化もわからない日本の学校に放り込まれるのです。そこには乗り越えなければならぬ壁が3つあると彼らはよく言います。「言葉の壁」、「文化の壁」、「心の壁」です。

2. 「言葉の壁」とは?

中国から来たある生徒が「2週間、僕はパンダだった。そして、みんなはすぐパンダに飽きた。」と言いました。初めのうちはみんなが見に来て、いろいろ話しかけてくれます。しかし、言葉が通じないと徐々に興味が薄れ、2週間経つと誰も見向きもしなくなります。最初、みんなが親切でなんとかやっていけるとほっとしたのも束の間、気がつくやと全くのひとりぼっちになっていたというのです。

まず、これを打破し、周りの人との関係を構築し、また、学習についていくには「日本語」ができることが最低条件になります。熊本市やいくつかの市町村では学校で専門の指導員による指導が来日直後から受けられます。特に熊本市では10数年前からセンター校による初期日本語指導が行われています。

しかし、日本語の指導が必要な子どもがどこに何人いるか把握されておらず、日本語指導が全くない市町村も数多くあります。日本語指導がなければ、将来、進学や就職にも支障をきたすようになります。このような状況を改善するために熊本県のどの市町村に編入してきても、熊本市と同じレベルの日本語指導が受けられることを目標に、「くもとこどものほんご」では、日本語指導体制が確立されていない市町村に専門の日本語指導員の派遣や日本語の教材の貸出などの活動を行っています。

3. 「文化の壁」と「心の壁」とは?

言葉が通じるようになって残る問題が「文化の壁」です。日常の些細な文化の違い、例えば、先輩に敬語を使う・親しい友達にも「貸して」や「ありがとう」を言う・トイレに誘われれば付き合いでついていく・授業中、先生の質問の答えがわかって手もあげない等、日本人にとっては普通のことでも、外国から来た子どもたちにとっては異文化なのです。それに気づかず、国にいた時と同じようにすると「態度が大きい」「目立ちすぎる」と嫌われたり、いじめられたりすることもあります。

言葉もできるようになり、日常の小さな文化の違いがわかるようになって、最後に残る壁が「心の壁」です。来日5年目の高校生の話です。「日本語はほとんど問題もなく友達もいる。でも、休み時間、ふと周りを見るとみんなグルー

ブ単位で話をしている。一人一人だと話せるが、グループになると入っていけない。いつも一人だという孤独感がある。」来日7年目の大学生の話、「名前を聞いて自分が中国人だとわかったとたん、今まで普通に話していたのに、相手の態度が急に変わったりする。あ、自分は外国人だったんだという壁を感じる。」

4.「文化の壁」や「心の壁」を乗り越えるために活動している団体『共に歩み青春を語る会』『在日外国人生徒交流会in熊本』

「共に歩み青春を語る会(菊陽町同歩会の中高生部)」は菊陽町で月2回、外国にルーツを持つ中高生が集まる会です。進路の問題や友達関係の話などを同じ立場で、また母語で話し合える場です。先輩の大学生からアドバイスをもらったり、先生方に在留資格のことなどを教えてもらったりもします。

また、遠くてこの会に来られない生徒は、年一回熊本市で開催される1泊2日の「在日外国人生徒交流会in熊本」に参加することができます。ここでは、熊本県全体から外国にルーツを持つ中高生30人程度が集まり、日頃の悩みを話したり、ネットワークを作ったりしています。この会は外国人生徒を受け入れている学校の教職員、日本語指導者、支援者にとっても、お互いのネットワークづくりや、子どもたちの本音が聞ける貴重な機会になっています。



5.「多文化共生社会づくり」の取り組みのひとつとして『国際ボランティアワークキャンプinAso 多文化共生分科会』

自分たちの文化は自分たちにはわからないものです。異文化の中に入って初めて、自分たちの文化が分かります。毎年阿蘇で行われる熊本市国際交流振興事業団が中心となり開催されている「国際ボランティアワークキャンプinAso」の多文化共生分科会は、外国にルーツを持つ生徒と日本人の生徒が実行委員となり、多文化共生の社会を作るにはどうしたらいいかを話し合う分科会です。一般参加の日本人高校生に異文化の中で生活することの大変さを、外国から来た子どもたちの体験を通して理解してもらいます。「あなたの名前は?」や「お腹が痛い」などの日常的な会話をジェスチャーのみで伝えることの難しさを、また、中国語やタガログ語だけの授業を受けることで、言葉が分からない

まま1日授業を聞く辛さを体験します。さらに日本に来たばかりの生徒の気持ちを綴った作文をみんなで読み合います。異文化の壁を乗り越え、多文化共生の社会をつくるために、今自分たちがやらなければならないことを話し合います。その結果、多くの生徒が「まずお互いの思いを率直に伝えること、お互いを知ろうとし、思いやることが大切だ」ということを学びます。



6.これから

ここで紹介した日本語指導や様々な活動は熊本市とその近郊が中心です。その他の地域には日本語支援がなく高校に進学できなかった生徒、同じ立場の生徒とのネットワークができずに一人で悩んでいる生徒、差別やいじめにあっている生徒がまだまだたくさんいます。彼らは自分一人で活動に参加することは出来ません。

彼らに声をかけ、活動の情報を知らせ、会に連れてきてくれる大人は子どもたちにとって、とても大きい存在となります。もし、自分の学校に、自分のクラスに、自分の近くに外国から来た子どもたちがいたら、ひと声かけて、一緒にこれらの会に参加していただけないか?

多文化共生の社会づくりへの大きな一歩です。

「外国から来た子ども支援ネット」
「くまもとこどものにほんご」
竹村 朋子/岩谷 美代子

「外国から来た子ども支援ネット」の活動紹介

- ・ 県内小中高への日本語指導員「くまもとこどものにほんご」の派遣や日本語教材の貸出し
- ・ 中国帰国・外国人生徒と保護者のための進路ガイダンスin熊本
- ・ 在日外国人生徒交流会in熊本
- ・ 国際ボランティアワークキャンプin阿蘇(国際事業団主催)多文化共生分科会オブザーバー

連絡先: tatomtom@hotmail.com

(担当: 竹村)

《外国にルーツを持つ子どものための教育相談窓口》

熊本市国際交流振興事業団では、外国にルーツを持つ子どもの進学、編入等の相談窓口を設けています。まずはお気軽にご連絡ください。

熊本市国際交流振興事業団多文化共生オフィス TEL 096-359-4995

「第7回国際ボランティアワークキャンプ in Aso」

8月10日(金)から2泊3日、阿蘇青少年交流の家で、第7回目となるボラキャンこと、国際ボランティアワークキャンプが、139名の高校生・留学生を集め開催されました。分科会活動(フェアトレード、自己表現、多文化共生、ボランティア、国際協力、日本文化、防災の7つの分科会)を中心に、スポーツ交流会、社会で活動している方々との出会い(未来職道)、異なる学校の高校生や異なる国からの留学生との共同生活をとおり、グローバル化著しい現代社会で、たくましく自分らしく生きる力を学びました。高校生実行委員長を務めた文徳高校2年生の増山雄輝君に今回のボラキャンを振り返ってもらいました。

「第7回ボラキャン」を終えて

第7回国際ボランティアワークキャンプ高校生実行委員長 増山 雄輝



増山雄輝 実行委員長挨拶

この夏最高の経験「ボラキャン」。今、目を閉じると、皆の眩しく輝く笑顔、阿蘇の雄大な光景が走馬燈のように浮かび上がってくる。これまでに味わったことがない充実感と達成感を与えてくれた。今回のボラキャンで実行委員長を務めることができたことを参加した約150名の高校生・留学生、ご協力いただいたアドバイザーはじめ全ての方々に感謝したい。

振り返ると、今回のボラキャンの取り組みは、昨年12月に始まった。高校生による実行委員会が結成され、以前のボラキャンについて学び、今回のテーマについて話し合った。何か行動を起こしたい、同じ思いを持つ高校生の先駆となって走りたい、ということで、テーマを「Let's take action ~俺が拓げる 君と繋ぐ」とした。今、考えると大きく漠然としたテーマであったが、「動きたいけど機会がない」高校生の現状を切り開くタイムリーなものであったと思う。

ボラキャン本大会がいよいよ始まり、自分自身や熊本・日本から地球規模の問題まで、7つの分科会に分かれ、徹底的に話し合い、思いを共有し、自分たちで出来るアクション・プランを考え、最終の報告会では参加者全員に発表した。通っている学校や暮らしてきた地域も違う参加者の視点や考えは多様で、各分科会では斬新

でユーモアあふれる多くの意見が出された。また、異なる価値観や人生観を持つ者同士が寝食を共にした3日間は、それぞれに刺激を与え合った。それでも最後には、3日前に知り合ったとは思えない強い一体感に包まれた。

私は、「自己表現」をテーマとした分科会を担当した。現在の自分自身をじっくり見直し、未来社会における自分の存在をより良いものに、そして夢を実現する為に、今、何が出来るか、何をすべきかを話し合った。分科会活動をとおり、私達は日頃自分自身を意識していないことが多く、他参加者から指摘され、初めて知る自分自身の姿に驚いた。色々な事に関心を持ち続けることで、自分自身を意識することが出来るようになり、それは今後の人生において大きな強みとなることを学んだ。

各分科会活動から導かれたアクション・プランが参加者皆それぞれに合った形で実行されていくことを期待する。私自身も、ボラキャンでの経験をこれからの人生に活かしていきたい、そして、多くの仲間との出会いに感謝し、培われた絆を大切にしていきたい。



参加者みんな集合写真

☆ボラキャンに関する活動は、スマイルステーションのブログにも掲載しています。

(URL:<http://smilestation.blogzine.jp/blog/>)

ち
ょ
つ
と

い
わ
せ
て
は
い
よ

カナダからの新しい国際交流員 キューレンです。

熊本市シティプロモーション課国際室 カナダ国際交流員
キューレン・ダッドリー

はじめまして、今年8月に、カナダの西海岸の海に面し、大都市ながら豊かな自然に恵まれたバンクーバーから参りました国際交流員(CIR)のキューレン・ダッドリーと申します。年は26歳です。着任したばかりの“青二才”で、すべてに不慣れですが、一日も早く熊本の暮らしに馴れるよう精一杯頑張ります。

先ず、僕の名前は「CIARAN」と書きますが、英語圏の人でも「キーラン」とか、「キュアリン」とか、「キュリン」とか、色々な発音となります。日本語のカタカナ表記に変える時どうしようか途方に迷いましたが、元々の英語での発音に近い「キューレン」に落ち着きました。このキューレンという名前は、あまり聞かない名前と思いますが、アイルランドの民族語「ゲール語」に由来し、「Little dark one」という意味です。日本語に直訳



東京での研修中

すると「暗闇の坊ちゃん」となり、名前としてちょっと変な感じがします。(正対に、僕は明るい性格です。)実は僕の母はアイルランド出身で、母国の伝統を継承してもらいたかったのでしょうか。

僕が、日本に興味を持つようになった「これだ!」という絶対的なきっかけはなかったのですが、思い起こすと、幼い頃から日本の

ゲームやアニメや漫画に夢中でした。16歳の時に、京都の港街、舞鶴の姉妹高校への交換プログラムで初めて来日しました。わずか十日間の短い滞在でしたが、日本人の暖かいおもてなしと思いやりに触れる機会となりました。また、伝統的な祭りや習慣を大事しながらも、最新技術の開発や設備整備をする日本の魅力的な姿を見ることが出来ました。帰国後は、「また日本に行きたい」と独学で日本語の勉強を始めました。高校卒業後、一年間ワーキングホリデーを利用して来日、大阪で友人と一緒に小さいながらも英会話学校を設立し、掛け替えのない経験をしました。その後、バンクーバーのプリティッシュ・コロンビア大学(UBC)でアジア言語と文化を専攻し、4年次には大阪大学に留学しました。

僕の人生を振り返ると、意識しないながらも、日本との縁があったことを運命に感じます。今、熊本城を間近に見る熊本市役所と国際交流会館に勤務することになり、また一つ僕の夢が実現できました。ここ熊本で生活を送りながら、カナダと日本の友好の架け橋になりたいと願っています。

街中で僕を見かけたら、気軽に「キューレン!」と声をかけて下さい。どうぞよろしくお願いいたします。



バンクーバーの海辺で、パパの顔!



大阪のアイルランド系バーで。ドラムを叩いてストレス発散!

国際掲示板

キズナ強化プロジェクト 熊本プログラム ホストファミリー募集

【開催目的及び内容】

アジア大洋州・北米地域との間で青少年交流を実施します。

高校・大学での地域交流、ボランティア活動を通して、東日本大震災での被災・復興経験を共有し、日本再生に対する外国からの理解を増進するとともに、被災地に復興に貢献します。熊本プログラムはこの一連事業における地方プログラムとしてインド共和国からの高校生訪問団を受け入れ、ホームステイを通して交流をしたいと考えています。

【期 間】

11月23日(金)~25日(日) 2泊3日

【募集家庭数】

25家庭(1家庭2名の受け入れ)

※ホームステイ受け入れ経費として12,000円(2名分)を提供します。

※受け入れに際して、オリエンテーション(質疑応答、確認事項)を開催します。日時と場所は後日連絡します。

【問い合わせ先】

一般社団法人くまもと教育プロジェクト TEL096-288-5526 <http://www.schola2012.jp>

ちよつと

いわせて
はいよ[®]

韓国人インターンシップ生、 熊本での4か月間を振り返って

韓国からグローバルインターンシッププログラムで24名が来熊し、1ヶ月間の日本語・日本文化研修を行い、うち2名が熊本市国際交流会館で3ヶ月間のインターンシップ活動を行いました。

パク・ヒョジン



左:ヒョジン、右:スンミン。
報告会の後、担当の下田さん(中央)と

こんにちは。熊本市国際交流会館(以下、会館)でインターンとして活動していた、韓国から来たパク・ヒョジンです。8月24日で私の会館での仕事は最後になりました。4ヶ月間の熊本生活を終えて、韓国

へ帰ることになりました。本当に時間があっという間に過ぎたなと感じています。短い期間でしたが、色んな経験ができたし、優しい熊本の人たちともたくさん知り合うことができ、帰るのが寂しいです。4ヶ月間を振り返ると本当に楽しい記憶ばかりです。阿蘇の火口や白川水源、山鹿の祭り、玉名の温泉、熊本城や水前寺公園など熊本のきれいな自然と名所をたっぷり感じることもできたし、会館で様々な人たちと出会ったおかげで日本語の実力もどんどん伸びました。出水中学校に行って韓国を紹介する出前講座をした時は緊張すぎて手が震えるぐらいでした。日本語で、日本の人たちの前で、私の国を紹介するのは思ったより難しいことでした。でもそのきっかけで、自分がすごく成長できたと思っています。

国際交流会館(以下、会館)での仕事も今日で最後です。ここで仕事をしたのは3ヶ月だけですが、ここで学んだもの、得たものは山ほどあります。会館の役目は名前どおり、国際的な交流を扱うところですので、外国人と接する機会が多かったです。私はここに来て、日本語の実力アップ、日本での仕事体験はもとより、国際交流活動を通じて外国人とふれ合いながら、ここでやっている色んなイベントも体験し、日本という国自体を身をもって学ぶことができました。

私は会館で働いた後、夢ができました。会館の仕事みたいに、より良く、より強い韓日関係を作れる仕事をしたいと思っています。韓国には「国際交流会館」みたいな国際的な交流を行う機関はあまりないですが、小さな団体はいろいろあります。日本以外での国や地域と交流している、国際的なボランティア

会館では翻訳の仕事もたくさんしました。韓国では漢字表記より韓国語固有のハングル表記を使う場合が多いので、日本語をそのまま直訳するときごちない文章になりやすいです。それを自然に翻訳するため自分なりに勉強しながら頑張りました。暑かった熊本の8月が最も盛り上がった火の国祭りや、高校生、留学生とお互いの考えを共有しながらたくさんのことを学んだ「国際ボランティアワークキャンプinAso」、声をかけてくれた韓国が好きな人たち、不器用な私にも親切に色々教えてくれた会館の人たち…この4ヶ月間、幸せな日々で、私はもったいないほど運がいいと思いました。熊本は、自分の中で二番目のふるさとになりました。「一期一会」。私の心に一番強く残った言葉です。違う文化の中で、違う言葉を使っている人たちがこんなに強い絆で結ばれて、本当によかったです。絶対忘れません。また、熊本の皆さんに会いに来たいと思っています。今までありがとうございました!韓国にも遊びに来てください。



公民館でキムチ作りの講座に参加

オ・スンミン

団体の活動に参加しながら、もっと世界に近づきたいと思っています。私が感じて、学んで、得たものを皆に伝えてあげたいです。

私はここにきて100人以上の友達ことができました。その友達は私の宝物であり、これから世界を一緒に歩む仲間だと思います。出会ったすべての方に感謝を伝えたいです。今まで本当にありがとうございました。



火の国まつり、おともやん総踊りの練習後

当事業団は、今月から韓国人インターンシップ生を受け入れる予定です。
会館にお越しの際は、ぜひ声をかけてください!



世界を知る It knows the world.

このページは世界を知るをテーマに「国際協力」については、独立行政法人国際協力機構(JICA)デスク熊本や、国際交流、協力分野で活躍している皆様のご協力を得て、日本で生活する私たちには日常知ることができない興味深い世界の状況を紹介いたします。

国際共通語「エスペラント」

～発表から125周年と、熊本エスペラント会90周年に思う～

皆様、国際共通語「エスペラント」をご存知ですか?今回の「世界を知る」のコーナーでは、この言語の生い立ちや、熊本エスペラント会の活動について、紹介します。

エスペラントは、今から125年前の1887年、ユダヤ系ポーランド人として生まれたラザロ・ルドビコ・ザメンホフが、人種差別や民族差別の原因は言語の違いだと考え、習得しやすい言語として作られた人工言語です。

このザメンホフが、エスペラントを小冊子にして世に発表すると、多くの人々の支持を集めました。例えば、発表間もない頃、新渡戸稲造が強く支持し、柳田國男はこれを習得するなど、ポーランドから遠い日本の人々からも関心や支持が寄せられたのであります。それはザメンホフがエスペラントの言語としての骨格だけを作っただけでなく、その言語を、言語による差別をなくす手段として位置づけるという、理念的な基礎も提示したからであります。現在では、世界全体での使用者はおよそ100万人いると言われ、特定の国や地域と結びつきがないかわりに、世界120カ国以上をカバーする独自のネットワークを持つまでに至っています。

そして今年が125周年を迎えることから、一般財団法人日本エスペラント協会では、「125」に因んだ活動をしようと、エスペラント図書を125ページ読むことから、125冊のエスペラント関連図書を販売するなど8項目を計画しました。更に、来年2013年は、日本エスペラント大会が100回目の節目の年に当たり、同年10月12日～14日の期間中、東京都23区内を会場に、公開講演会、エス訳作品集の発行、エス団体文集の発行の三つの事業が予定されています。

さて、熊本エスペラント会の生い立ち、活動を紹介します。熊本県のエスペラント運動の先輩として、世界一周旅行の最後の船中でエスペラントを学んだ徳富蘆花、徳富愛子夫妻がいます。二人は後日、出版したその紀行文「日本から日本へ」の第一章第一節を、英語と共にエスペラントにも訳しています。また、宮崎民蔵は「Internacia Socia Revuo」というエスペラントの左翼系雑誌を遺品の中に残しています。これら三人の先輩とエスペラントとの関係については当時のエス

ペラント界にはあまり知られる事なく、埋もれていたようです。

このような前史を持ちながら熊本エスペラント会は1922年に創立され、言語による差別をどの国家にも、民族にも属さない言語エスペラントで解消しようと、色々な努力をしてきました。日中戦争開始から第二次世界大戦終結へ至る時代には、官憲の弾圧を受け、一部の会員は収監されるという、厳しい扱いを受けた事もありました。

戦後、当会は直ちに再組織され、文通を通じて、多くの外国人エスペランチストと交流することにより、民間レベルの国際交流を実践して、エスペラントの言語としての価値を認識したり、高めたりしてきました。そのような中、当会員の故平野雅曠(まさひろ)は、ハイデルベルクのエスペランチストとの文通を続け、後に、熊本市とハイデルベルグ市が友好都市になることを先導する役割を果たすなど活躍してきました。本会会長を長年勤めてきた鶴野六良は、耳鼻咽喉科の医学博士ながら針医療を学んで、これを開発途上国に普及させるために努力し、ポーランドやブラジルなどでの針医療講習や、診療を行う傍ら、エスペラントによる講習を通じて針医療法の普及に貢献してきました。

このような実績を重ねつつ、当会は90周年を迎えたのでありますが、まだ道遠し、と言わざるを得ない状況です。その理由の一つは、英語至上主義を是正しなければならないということです。今年4月8日の朝日新聞のザ・コラムで同新聞社山中季弘社会部長は、元ハーバード大学長で米財務長官も務めたローレンス・サマーズが「英語はいまや世界言語となった。アジアでの商談もアフリカでの治療も中東での和平協議も、みな英語でこと足りる。米大学はこの先、もう手間のかかる外国語教育に励む必要がなくなるだろう。」と提唱したと記し、米国が英語を他国に押しつけ平然としていることを批評しています。言語は尊重され、差別的な意識で取り扱われてはなりません。言語における平等を実現するために、私達、熊本エスペラント会は闘い、更なる努力を続けなければならないと考えています。

熊本エスペラント会 TEL096-232-1818(木野)

未来のために

ここでは、私たちの未来を考える上でとても重要な視点である共に生きる社会、多文化共生について
 専門家である羽賀友信さんにシリーズでご寄稿いただいています。
 今回は国際協力についてご寄稿いただきました。

TICAD V(第5回アフリカ開発会議)に向けて

平成25年6月に「TICAD~Tokyo International Conference on African Development~V(第5回アフリカ開発会議)」が横浜で開催されます。この会議は1993年以降5年に1回、日本政府主導により国連と国連開発計画(UNDP)及び世界銀行等の共同で開催されています。首脳級の会合と閣僚級会合が同時に開催されます。2008年の第四回会議では、「元気なアフリカを目指してー希望と機会の大陸ー」との基本メッセージの基で経済成長の加速、人間の安全保障の確立及び、環境・気候変動問題への対処が重点事項として議論されました。最終成果物としてアフリカ開発の取組み、方向性への政治的意思を示す「横浜宣言」及び、今後のTICADプロセスの具体的取組みを示すロードマップである「横浜行動計画」、実施状況の検証を行うための「TICADフォローアップメカニズム」の3つの文章が発表されました。

TICADはアフリカ開発を扱う、世界最大級の政策フォーラムとして高い評価を受けその役割を果たすことができました。また本年2月28日には外務省と政策研究大学院大学による外交シンポジウムが開かれ、玄葉外務大臣が「我が国のグローバルな課題への取組み~フルキャストディプロマシー~」について述べられました。これは政府、地方自治体、NGO、企業、個人などが連携しオール日本と

しての強みを活かした国際協力を推進する外交政策です。言い換えれば、日本の総力を上げた外交を展開すべきだということです。TICAD Vを国際協力で日本が重視する4つの取組みを実践する場と位置づけました。



筆者:羽賀 友信さん
 長岡市国際交流センター「地球広場」センター長
 新潟NGOネットワーク顧問
 JICA地球ひろば 国際協力サポーター
 長岡市教育委員、JICA専門家
 ※当事業団多文化共生アドバイザー

- ①人間の安全保障(人間一人一人が力を発揮できる国際社会に向けて)
- ②強靱な社会づくり(世界の災害への抵抗力強化)
- ③平和構築のための人づくり・国づくり(紛争からの脱却への支援)
- ④グリーン経済・低炭素社会移行のためのルールづくり(世界全体のグリーン成長促進)

これらは1国の国益のみではなく、国際益の中の国益という考え方です。

あなたの企業も一緒に情報発信しませんか!?

この「ニュースレターくまもと」は、当事業団の機関紙として平成7年11月の創刊以来、熊本の国際交流・協力に関する情報を、日本各地の国際交流協会、国際交流・協力機関や市民、在住外国人の方々を中心に幅広く発信し、国際交流・協用に感心を持つ人、開発教育関係の教育者、留学を考えている人、異文化理解に興味を持つ人など、多くの方々にご愛読いただいています。

*web でも公開しています。(<http://www.kumamoto-if.or.jp/>)

発行:年4回(4月、7月、10月、1月) 部数: 3,000部

配布先:市内の小・中学校、高校、大学、全国の国際交流協会、市内の国際交流・協力団体、当事業団のボランティア登録者及び賛助会員(約500名)、熊本市役所関係機関(区役所、市民センター、公民館等)、熊本市国際交流会館内

広告の種類:1/4ページ(この広告募集のサイズです。)

契約期間及び料金:1/8のおためしサイズ(1回) 5,000円単発(1回) 20,000円、半年契約(2回) 30,000円
 年間契約(4回) 40,000円

★まずは、1/8のおためしサイズ(1回5,000円)で貴社の情報を発信しませんか!

